
アネモネ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アネモネ

【Nコード】

N13470

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

愛と美の女神アフロディーテは美少年アドニスを愛していた。だがその彼を失い悲しみに捉われた彼女は。ギリシア神話から題材を取ったお話です。

第一章

アネモネ

アフロディーテは美を司る女神だ。

従って非常に美しくまた恋多き女神だ。彼女は今も恋をしていた。

「ええと、今度のお相手は」

「シリアの王子なのですね」

「ええ、そうよ」

オリンポスの自身の宮殿の中で周りの従神達の言葉に微笑みながら応えている。豊かな波うつ見事な金髪に透き通った白い肌、青い切れ長で垂れた瞳は何処までも澄んでいて唇は紅に染まっている。その薄い赤い服に包んだ身体からはかぐわしい香りが出て胸も腰もはつきりと浮かび出ている。妖艶な美をそこに見せている。

「アドニスというのよ」

「アドニスですか」

「人ですね」

「そうよ、人よ」

人であろうとも神の恋の相手になる、それがギリシアである。

だからアフロディーテにとってもそれは当然のことだった。彼女自身これまでその人との間に何人かの子をもうけてもいるのである。それで普通に受け止めてだ。そのうえで従神達に話しているのだ。優雅に横たわるように座りだ。そうして言う言葉は。

「それではだけれど」

「はい、それでは」

「どうされますか？」

「湯浴みをするわ」

こう言うのであった。

「貴女達も一緒にね」

「はい、それでは」

「今すぐに用意をします」

「御願いますわ。お湯の中には花を入れて」

言いながら立ち上がる。その彼女の周りに従神達が来て服を脱がせる。するとそこから見事なまでの裸体が姿を現わしたのであった。それを誇示するわけでもなく露わにさせたまま。彼女はまた告げた。

「そして香水も」

「わかりました」

「ではそれもまた」

「湯浴みの後で行くわ」

そしてこう言った。

「アドニスのところだね」

「ではその様に」

こんな話をして従神達を連れて湯浴みをする。それで身体を清めてそのうえで人間の世界に下りてそうしてシリアの彼の場所に向かった。そこには。

まるで少女の様に整った顔の少年がいた。黒い髪は巻いていて前後に短くしている。あどけなささえ見えるその顔には黒いきらきらと輝く目がある。肌はアフロディーテのものにも勝るとも劣らないまでに白く透き通るようだ。そしてその身体は華奢で比較的小柄だ。その身体を白く丈の短い服で覆っている。その彼のところに来てそのうえで声をかけたのだ。

「アドニス」

「アフロディーテ様ですか」

「そうよ、私よ」

彼のところに歩み寄っての言葉である。

「御免なさい、ずっと来れなくて」

「ずっとと仰いましても」

アドニスはそのアフロディーテの手を取ってそのうえで言った。

「二日前に御会いしたではないですか」

「そうだったかしら」

「はい、昨日御会いできなかっただけで
それだけだというのだ。

「その前は一週間ずっと二人きりでしたね」

「楽しい時間はすぐに終わるものなのよ」

アフロディーテはアドニスにこう返した。

「だからそれはね」

「それは？」

「短く感じるのよ。そして離れている時間は辛いから」

「長く感じるのですか」

「そうよ。そういうものなのよ」

こう話すのだった。

「それは貴方も同じではなくて？」

「はい」

アドニスはアフロディーテのその言葉にこくりと頷いた。そのう
えでの言葉だった。

「確かに。昨日はとても長く感じました」

「そうね。本当に長く感じたわね」

「そういうことですね」

「そうよ。昨日はどれだけ待ち遠しかったか」

「そうです」

「そうしてだ。また話すのだった。」

「では今日は」

「これから暫くまた一緒にいられるわ」

こう話してである。アフロディーテはアドニスをそっと抱き寄せ
てである。そうしてそのうえでその耳元でそっと囁くのであった。

「それでは今から」

「はい、今から」

「二人きりで」

妖艶な微笑みを浮かべそのうえでの言葉だった。

そしてだ。二人はアドニスの部屋に入った。それから三日三晩共にいた。

第二章

その中でだ。アドニスはい己のベッドの中にいた。アフロディーテも共だ。その彼に寄り添っている。そうしてそのうえで彼に対して囁いてきた。

「ねえ」

「何でしょうか」

「もう少し一緒にいられるわ」

「今はですか」

「あと五日」

彼を濡れた目で見ての言葉だった。

「五日いられるわ」

「五日ですか」

「そうよ。あと五日」

また言う彼だった。

「五日いられるから」

「わかりました」

アドニスはアフロディーテのその言葉に頷いた。そしてだ。

「それでは」

「楽しみましょう」

まずは髪をかきあげた。そうしてだ。

アドニスの身体を抱き寄せた。そのうえでまた囁いてみせた。

「来て……」

「はい、また」

アドニスは彼女の言葉にこえて自分の身体も動かした。そのまま女神の上に来た。そうしてそのうえでまた愛を交えさせるのだった。二人は愛を育んでいた。その仲は二人の周りだけしか知らないことに思われていた。しかしここでそれを知ってしまった者がいた。

戦いの神アーレスだ。彼女はアフロディーテの恋人でもあったの

だ。その彼がふと話を聞いたのだ。話していたのは太陽の神アポロンと月の女神アルテミスの双子の兄妹だ。オリンポスにおいて彼等の話をたまたま聞いたのだ。

「最近アフロディーテの姿を見ないが」

「兄上、それには理由があるのです」

アルテミスはこう兄に話を出してきた。

「実は」

「何だ、また新しい恋人ができたのか」

「はい」

アーレスは二人の話を物陰から聞くことになった。丁度二人のいる広間に入ろうとしたところで話を聞いてだ。隠れて聞くことになったのだ。

物陰に隠れそのうえで耳をそばだててだ。そうして話を聞く。

二人の神は彼に気付くことなくだ。そのまま話を聞いていた。

「そうなのです」

「やれやれだな」

アポロンは妹神の言葉を聞いて呆れたような声を出した。

そしてだ。そのうえでまた言うのであった。

「彼女も。好きだな」

「全くです。あの方は男性だけではありませんし」

「女性もか」

「はい、異なる性でも同じ性でも愛を与えられます」

ギリシアでは同性愛は普通であった。愛を司るアフロディーテがそれを知らない筈がない。そうしてそのうえでまた話をするのだ。た。

「ですから」

「そうだな。しかし」

「しかし？」

「それにしても好きだな」

アポロンは言葉からも首を傾げさせていることがわかった。

「本当に」
「困ったことです」
「それで今度の相手は誰なのだ？」
「内密の話ですが」
アルテミスは双子の兄だからこ話したのだった。だがアーレスが聞いていることには気付かない。それはここでも同じだった。
「シリアの王子でして」
「シリアのか」
「アドニスといます」
「ああ、あの少年か」
アポロンは彼の名前を聞いてすぐに頷いた。
「まるで少女の様な美少年だね」
「はい、本当に」
「彼ならアフロディーテ殿が愛するのも道理」
アポロンの言葉は今度は納得したものであった。
「それもまた」
「そうですね。私も彼が少女なら」
アルテミスは処女神だ。だから男を傍には近寄せない。だからこ
うした話になるのだ。
「その時は」
「御前も相変わらずだな」
「そうですね」
「全く。そうしたところがな」
「誓っていますので」
アルテミスは呆れた声の兄にこう返した。
「ですから」
「そうしたところが相変わらずなんだよ」
また妹に返した兄だった。
「本当にな」
「左様ですか」

アーレスはここからの話は聞かなかった。彼の知りたいたいことはもう聞いたからである。そしてそのついでだ。すぐに行動に出たのであった。

第三章

「よいな」

「はい」

己に従う従神の一人にだ。トラキアの自身の宮殿において命じていた。そこは赤く紅蓮の炎に包まれているようだ。その赤い宮殿の中で命じていた。

「そなたは今からシリアに赴きその王子アドニスを殺せ」

「殺してよいのですか」

「構わん。私が許す」

その若く整っているが猛々しい顔に暗いものを宿らせての言葉だった。

「この私がだ」

「それでは今から」

「そうだ、殺せ」

こう命じた。その顔と言葉でだ。

「わかったな、いいな」

「ですが」

だがその従神はだ。ここで言ってきた。

「私の姿のままでは」

「アフロディーテにわかってしまうというのだな」

「そうです」

彼が今言うのはこのことだった。

「ですからそのままでは」

「それについても考えてある」

アーレスの言葉の響きには邪なものも入っていた。明らかに企んでいた。

「既にだ」

「といますと」

「猪になれ」

こう彼に命じた。

「猪になりだ。そのうえでアドニスを襲え」

「そしてその牙で、なのですね」

「そうだ。そのうえで消せ」

また彼に言った。

「いいな。消すのだ」

「わかりました。ではすぐに」

「あの人間の王子がいなくなれば私一人になる」

「アーレスの暗い顔はそのままだ。そのままの顔で言うのである。」

「そうなればアフロディーテとまた共に褥を共にできるといっただけだ」

「アーレス様の為に」

従神は己が忠誠を誓うその神の為に今シリアに向かった。そうしてだ。

アドニスはこの時森の中にいた。自身のいる宮殿から少し出たその森の中に入った。そのうえで森の中を自分の従者と共に歩いていた。

「アドニス様、近頃ですが」

「誰かと御会いになっていますか？」

その従者達が後ろから彼に問う。森の中には日の光が優しく差し込み実に清々しい。その中を歩きそのうえで話をしているのである。

「どなたかと御会いになっているようですが」

「それは誰ですか？」

「ああ、君達には行ってなかったね」

アドニスもそれを聞いて笑顔で返した。

「そのことを」

「ではどなたとでしょうか」

「会われているのは」

「女の人だよ」

まずはこう話したのだった。

「女の人とね。会ってるんだよ」

「女の人とですか」

「そうだったのですか」

「そうなんだ。とても綺麗な人でね」

アフロディーテとは言わなかった。まさかその相手が女神だと言える筈もなかった。だからこのことはあえてぼかして言ったのである。

「その人とね。会ってるんだ」

「そうですか。アドニス様にもそうした方が」

「できたのですね」

「今日も会うよ」

そしてこうも話した。

「またね」

「またですか」

「今日も」

「今夜来てくれるよ。それが楽しみでね」

「はい、それでは」

「我等はその用意をしておきますので」

こう話してそのうえで森の中を歩き森林浴を楽しんでいた。しかしその彼の前にだ。一匹の巨大な黒い猪が出て来たのであった。

第四章

「猪!？」

「馬鹿な、そんな筈がない」

「この森に猪がいるとは」

従者達はその猪を見てすぐに剣を抜いた。そのうえで主を護ろうとする。

アドニスの前に立ち猪に向かおうとする。しかしであった。

猪は突進しそのうえでまずは従者達を吹き飛ばした。そしてだつた。

アドニスのその柔らかい腹に牙を突き刺した。それは深々と突き刺さり彼を上大きく放り投げた。アドニスの身体は鮮血を撒き散らし緑の世界を赤いもので染め上げそのうえで地面に叩き付けられた。

そうしてそのまま倒れる。猪は何時の間にか姿を消していた。

何とか起き上がった従者が彼のところにすぐに寄る。だがもう彼は今にもこときれようとしていた。

「アドニス様!」

「僕はもう駄目だ」

そのアドニスが彼等に対して言った。もうその顔には死相が出ている。

「もう」

「いえ、安心して下さい」

「大丈夫ですから」

「いや、わかるよ」

アドニスは従者達の気遣うその声を聞いてもこう返す。

「自分のことだから。ただ」

「ただ?」

「どうされたのですか?」

「僕をアフロディーテ神の神殿に」

そこにだというのだ。

「そこに連れて行ってくれないからな」

「アフロディーテ神のですか」

「そこにですか」

「うん、そこに」

こう言うのである。

「そこに連れて行って欲しい。僕が死なないうちに」

「は、はい」

「わかりました」

従者達も彼のその言葉に頷いた。

「今すぐに向かいます」

「それならば」

「頼むよ。僕の最後の御願いだから」

アドニスはすぐにその地のアフロディーテの神殿に運ばれた。

するとだ。すぐにアフロディーテが出て来た。彼女はすぐにアド

ニスを抱き上げそのうえで必死の形相で彼に声をかけた。

「アドニス、どうしてなの!？」

まずはこう彼に問うた。

「どうしてそんな怪我を」

「すいません」

だがアドニスはその彼に申し訳ない声でこう言うだけだった。

「僕はもう」

「そんなことは言わないで」

彼の言葉をすぐに打ち消した。そのうえで彼のその頭を抱き寄せ
る。

その顔は白くなってきていた。今死のうとしているのは明らかだ
った。

しかしそれでもだ。アフロディーテは諦めたくはなかった。その
愛しい相手を何としても失うまいと。彼に対してこう言ったのであ

った。

「イーコールをすぐに。そうすれば」

「いえ、もう間に合いません」

こう返すだけのアドニスだった。

「僕はもう」

「そんな、どうして……」

「さようなら」

遂にこの言葉が出された。

「貴女と一緒にいられて嬉しかったです」

「私も……」

アフロディーテは泣いていた。その青い美しい目から涙を流しながらそのうえで彼に対して言葉を返していた。そしてであった。

「貴方のことは何があっても」

「覚えていてくれるのですか」

「ええ、忘れることはないわ」

こう彼に告げた。

「何があっても」

「有り難うございます。では僕は」

「貴方は？」

「もう思い残すことはありません」

これが彼の言葉であった。

「もうこれで」

「そんな、それではもう」

「はい、お別れです」

また別れの言葉を告げた。そうして。

「永遠に……」

最後にこう言っつてゆっくりと目を閉じてだった。アドニスは愛するアフロディーテのその手の中で息絶えたのであった。

「アドニス……」

女神はその彼をまだ抱いていた。そのうえで泣き続けていた。

「貴方のことは忘れない。忘れたくないから」

こう言って手をさっと動かした。するとだった。

アドニスと亡骸が変わった。光に包まれそうしてだった。

「花に」

「赤い花に」

「ええ、花になってそれで」

その赤い花を手にとって言うアフロディーテだった。

「この世を飾って。私はこの花を見てその度に貴方を思い出すわ。忘れたたくはないから」

言いながら涙を落とした。その涙は赤い花に落ちて花を濡らした。濡れた花はこれまでよりもさらに美しく見えた。悲しい美しさだった。

この花がアネモネだ。人々はこの花を見る度にアドニスという少年を思い出す。女神に愛されその心に永遠に残る少年をだ。この花は今も咲き誇っている。女神は今もこの花を見て彼のことを心に残しているのである。

アネモネ 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1347o/>

アネモネ

2010年10月8日12時12分発行